

スポーツにおける目標志向性と競技意欲の構造の関係

藤 田 勉*・中 本 浩 揮**・幾 留 沙 智***

(2012 年 10 月 23 日 受理)

The relationship between goal orientation and structure of motivation for sport

FUJITA Tsutomu, NAKAMOTO Hiroki, IKUDOME Sachi

要約

本研究の目的は、大学運動部員を対象として目標志向性と競技意欲の構造の関係を検討することであった。研究方法は大学生 248 名を対象とした質問調査であった。データの分析方法として、目標志向性尺度の得点に基づいて目標プロフィールと呼ばれる類型化を行い、課題志向群、自我志向群、両志向群、無志向群という 4 群について競技意欲の尺度得点と因子構造の比較を行った。競技意欲は心理的競技能力の下位尺度を用いた。競技意欲尺度の得点を各群で比較したところ、両志向群が最も適応的であり、無志向群が最も不適応的であることが示された。また、課題志向群は無志向群よりも闘争心と自己実現意欲が高く、自我志向群は無志向群よりも勝利意欲が高いことが示された。次に、競技意欲における下位尺度の因子構造を各群で比較したところ、自我志向群、両志向群、無志向群は、競技意欲を 1 因子構造として構成したが、課題志向群のみが競技意欲を 2 因子構造で構成しているという違いがみられた。

キーワード：達成目標理論、動機づけ、体育、心理的競技能力

* 鹿児島大学教育学部 准教授

** 鹿屋体育大学体育学部 講師

*** 鹿屋体育大学大学院体育学研究科大学院生

はじめに

スポーツ選手にとって競技意欲を高く持つことが重要であることは言うまでもない。スポーツ心理学における動機づけ研究には競技意欲を目標の観点から分析してきた達成目標理論研究がある。達成目標理論には提唱されているモデルがいくつかあるが、課題志向性と自我志向性の2種類の目標志向性によって、認知、感情、行動の違いを説明する Nicholls モデル (Nicholls, 1989) の研究の歴史が長い。

他にも3目標視点 (Elliot & Church, 1997)、4目標視点 (Elliot & McGregor, 2001)、6目標視点 (Elliot et al., 2011) を提唱した Elliot モデルがあり、近年、注目され研究も盛んであるが、目標の数が増えればそのメカニズムが複雑になってしまうというデメリットもある。一方、Nicholls モデルはシンプルであることと、目標志向性を類型化して分析できるというメリットがある。Elliot モデルでも重要な視点が提示されているが、詳細は他に譲り、本研究は Nicholls モデルについて論じていく。

Nicholls モデルでは、達成目標を成功の獲得を目指すこととして、課題関与と自我関与という2種類の成功獲得へのアプローチを仮定している。課題関与とは課題そのものの自体に取り組むことに専念するアプローチであり、自我関与とは他者より優れることに専念するアプローチである。課題関与になるあるいは自我関与になるかは個人差があると考えられており、その視点から研究され始めたのが達成目標志向性あるいは目標志向性である。

目標志向性研究では、課題関与と自我関与の個人差を測定するため、課題志向性尺度と自我志向性尺度で構成される目標志向性尺度が開発された。TEOSQ (Duda, 1988) や POSQ (Roberts et al., 1998) は代表的なスポーツにおける目標志向性尺度である。この尺度では、“スポーツをしているときに最も成功したことを感じるのはいつですか?” という質問文で始まり、“一生懸命に努力したとき (課題志向性)” や “他人より優れていたとき” という項目にそれぞれ5段階評定で回答するというものである。

課題志向性あるいは自我志向性を規定する要因は能力概念であると考えられている。能力概念とは能力の捉え方のことであるが、この場合、努力と能力の区別の仕方から2種類の能力概念がある。Nicholls (1989) は、能力と努力を同じものとして捉える未分化概念と、能力と努力を別のものとして捉える分化概念を仮定している。能力を未分化概念として捉える場合は努力した量が能力の高さであると考えするため、努力すること自体に成功を感じる課題志向性となる。一方、努力と能力を別のものとして捉える場合は努力するということは能力が低いためであると解釈するため、他者に比べて優れることに成功を感じる自我志向性となる。

課題志向性と自我志向性は独立した関係であるとされてきた。すなわち、課題志向性が高い人と自我志向性が高い人、それ以外にも、課題志向性と自我志向性の両方が高い人、課題志向性と自我志向性の両方が低い人があるということになる。スポーツ心理学では、これら4つの類型から分析する目標プロフィールがある。具体的には、課題志向性尺度と自我志向性尺度それぞれの

平均値あるいは中央値を境にして、課題志向性と自我志向性の両方が高い群を両志向群、課題志向性が高く自我志向性が低い課題志向群、課題志向性が低く自我志向性が高い自我志向群、課題志向性と自我志向性の両方が低い自我志向群の4群を比較検討する。

目標志向性は時間の経過と共に環境要因をはじめとする様々な要因の影響を受けるため、可変性がある。しかしながら、個人の特性として考えられており、尺度の安定性も高い。Duda(1998)は青少年のサッカー選手を対象とした研究でシーズン中の目標志向性が安定していたことを報告しているほどである。すなわち、課題志向性尺度あるいは自我志向性尺度の得点自体は多少上下するが、課題志向群であった選手が自我志向群になるほどの大きな変化はなかなか起こらないと考えられる。

目標志向性プロフィールによる分析を行ったスポーツ心理学の先行研究で示されたおおよその結果は、両志向群が最も適応的な動機づけ、それと同等レベルで課題志向群、次いで自我志向群、そして最も不適応的な動機づけとされているのが無志向群である(例えば、Duda, 2001; Roberts, 2001)。しかしながら、先行研究で扱われてきた動機づけは、内発的動機づけなど、熟達度や努力度を焦点としたものが多い。競技スポーツの文脈には競技意欲を多面的な観点から構造化した変数もあり、必ずしも熟達度や努力度だけを競技意欲として考えているわけではない。

わが国には、従来からスポーツ選手を対象とした心理検査として心理的競技能力検査が用いられてきた。心理的競技能力検査は5つの上位尺度と11の下位尺度で構成されており、競技意欲もその中に含まれている。その競技意欲は、忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲という下位尺度で構成されており、これら下位尺度は必ずしも自己の熟達のみに焦点が当てられている概念ではない。そこで本研究では、目標志向性と競技意欲の構造の関係について、目標プロフィールの観点から分析し、両志向群、課題志向群、自我志向群、無志向群の4群で競技意欲(忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲)を比較し、また、下位尺度の因子構造の違いを明らかにする。

研究方法

1) 調査対象

大学運動部員248名を対象とした質問紙調査を実施した。対象者となった大学運動部員は教育学部あるいは体育学部に所属している1年生から4年生であった。また、対象者の競技レベルは、市民大会あるいは県大会出場の選手から全国トップクラスあるいは世界選手権出場の経験を有した選手であった。

2) 調査内容

調査票を構成した質問項目には、磯貝(2000)の目標志向性尺度、徳永(2002)の心理的競技能力から競技意欲尺度(忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲)を使用した。

結果

1) 基本統計量と相関行列

各尺度の平均値 (M), 標準偏差 (SD), 歪度, 尖度, 各尺度間の相関行列を表 1 に示した. 課題志向性と自我志向性は中程度の正の相関であった. 課題志向性あるいは自我志向性と競技意欲の各尺度 (忍耐力, 闘争心, 自己実現意欲, 勝利意欲) の相関について, 自我志向性は忍耐力及び自己実現意欲と無相関であったが, その他はいずれも弱い正の相関であった. 競技意欲の下位尺度間の相関はいずれも弱から中程度の正の相関であった.

表 1. 基本統計量と相関行列

尺度	M	SD	歪度	尖度	1)	2)	3)	4)	5)	6)
1) 課題志向性	4.15	0.57	-0.43	-0.48	—					
2) 自我志向性	3.83	0.72	-0.53	-0.19	0.42	—				
3) 忍耐力	3.65	0.78	-0.74	1.49	0.23	0.03	—			
4) 闘争心	4.01	0.90	-1.10	0.94	0.32	0.23	0.56	—		
5) 自己実現意欲	3.90	0.67	-0.96	2.70	0.32	0.15	0.46	0.56	—	
6) 勝利意欲	3.74	0.76	-0.61	0.27	0.26	0.29	0.34	0.61	0.35	—

2) 目標プロフィールによる競技意欲の比較

課題志向性尺度と自我志向性尺度のそれぞれの中央値を境にして, 課題志向性と自我志向性の両方が高い両志向群, 課題志向性が高くて自我志向性が低い課題志向群, 課題志向性が低くて自我志向性が高い自我志向群, 課題志向性と自我志向性の両方が低い無志向群の 4 群を構成した (表 2).

表 2. 目標プロフィール別の目標志向性尺度の得点

	1) 両志向群 (課題高/自我高)		2) 課題志向群 (課題高/自我低)		3) 自我志向群 (課題低/自我高)		4) 無志向群 (課題低/自我低)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
課題志向性	4.64	0.25	4.64	0.19	3.79	0.39	3.67	0.38
自我志向性	4.46	0.34	3.36	0.47	4.30	0.27	3.21	0.54

両志向群, 課題志向群, 自我志向群, 無志向群の 4 群について, 競技意欲の下位尺度である忍耐力尺度, 闘争心尺度, 自己実現意欲尺度, 勝利意欲尺度のそれぞれの得点を 1 要因分散分析で比較しところ, 忍耐力以外の闘争心, 自己実現意欲, 勝利意欲に 5% 水準で有意な主効果が示された. 以下は多重比較の結果である. 闘争心と自己実現意欲については, 両志向群と課題志向群は無志向群よりも 5% 水準江有意に高いことが示されたが, それ以外に有意な差は示されなかつ

た．勝利意欲については，両志向群と自我志向群は無志向群よりも 5%水準で有意に高いことが示されたが，それ以外に有意な差は示されなかった（表 3，図 1）．

表 3．分散分析の結果

	1) 両志向群 (課題高/自我高)		2) 課題志向群 (課題高/自我低)		3) 自我志向群 (課題低/自我高)		4) 無志向群 (課題低/自我低)		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
忍耐力	3.75	0.81	3.86	0.66	3.59	0.81	3.49	0.77	2.71	n. s
闘争心	4.29	0.74	4.21	0.69	4.03	0.87	3.65	1.00	8.62	1), 2) > 4)
自己実現意欲	4.07	0.55	4.14	0.60	3.82	0.58	3.69	0.77	6.57	1), 2) > 4)
勝利意欲	3.92	0.65	3.82	0.64	3.89	0.82	3.46	0.81	6.35	1), 2) > 4)

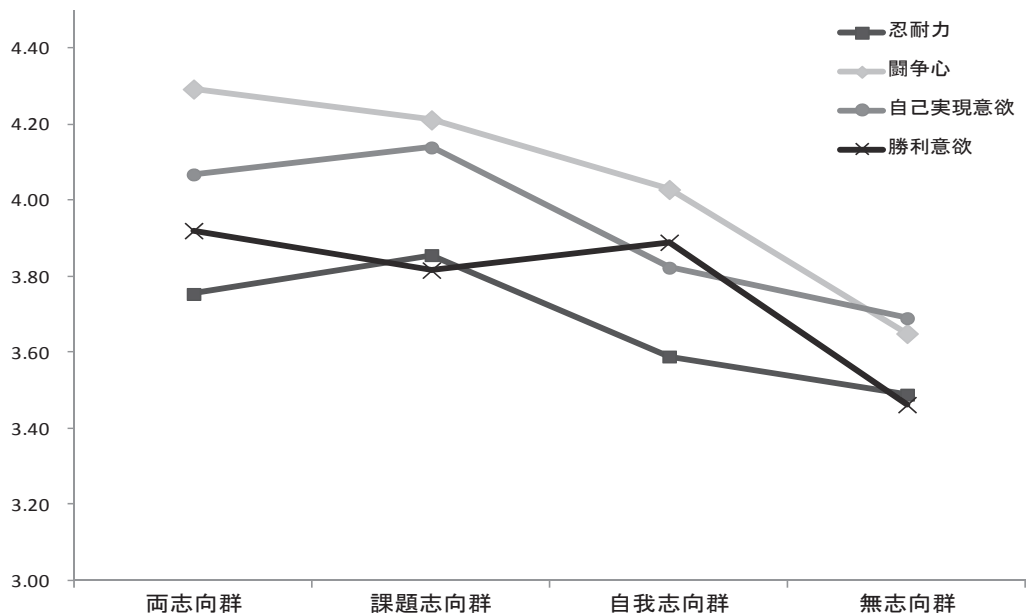


図 1．目標プロフィールに基づく競技意欲の下位尺度得点

3) 目標プロフィール別の競技意欲の下位尺度間の相関行列

両志向群，課題志向群，自我志向群，無志向群の 4 群それぞれについて，競技意欲の下位尺度間（忍耐力，闘争心，自己実現意欲，勝利意欲）の相関係数を算出した（表 4）．両志向群における競技意欲の下位尺度間の相関はいずれも中程度の正の相関であり，課題志向群における競技意欲の下位尺度間の相関は弱から中程度の正の相関であり，自我志向群における競技意欲の下位尺度間の相関は，無相関から中程度の正の相関であり，無志向群における競技意欲の

下位尺度間の相関は無相関から中程度の正の相関であった。

表4. 尺度間の相関係数（両志向群／課題志向群／自我志向群／無志向群）

	忍耐力	闘争心	自己実現意欲
忍耐力			
闘争心	0.58/0.46/0.35/0.65		
自己実現意欲	0.49/0.35/0.23/0.52	0.56/0.13/0.49/0.62	
勝利意欲	0.18/0.15/0.44/0.41	0.47/0.57/0.56/0.66	0.30/-0.12/0.43/0.41

4) 目標プロフィール別の競技意欲の因子構造

競技意欲の下位尺度についてプロマックス回転の因子分析を行ったところ、両志向群、自我志向群、無志向群については1因子構造で構成されたが、課題志向群は、第1因子を勝利意欲と闘争心、第2因子を忍耐力と自己実現意欲とする2因子構造となった（表5～表8）。また、因子間相関は弱い正の相関（ $r=0.37$ ）であった。

表5. 両志向群の因子構造

	第1因子
闘争心	0.91
自己実現意欲	0.67
忍耐力	0.64
勝利意欲	0.44

表6. 課題志向群の因子構造

	第1因子	第2因子
勝利意欲	0.82	-0.25
闘争心	0.77	0.22
忍耐力	0.15	0.65
自己実現意欲	-0.21	0.61
第1因子		
第2因子	0.37	

表7. 自我志向群の因子構造

	第1因子
勝利意欲	0.77
闘争心	0.76
自己実現意欲	0.58
忍耐力	0.49

表8. 無志向群の因子構造

	第1因子
闘争心	0.96
忍耐力	0.69
自己実現意欲	0.67
勝利意欲	0.64

考察

本研究は、大学運動部員を対象として、スポーツにおける目標志向性と競技意欲の構造の関係を検討するものであった。大学運動部員248名を対象とした質問紙調査により示された結果は、以下の通りである。

目標志向性における課題志向性と自我志向性の相関は中程度の正の相関であった。目標プロフィールの類型化を行う場合には課題志向性と自我志向性が独立していることが前提とされているため、本研究の分析方法が適切ではないことは否めないが、課題志向群あるいは自我志向群それぞれの特徴ともいえる結果が示されたため、一定の価値はあると考えている。課題志向性と自我志向性の独立性（相関）については従来から議論されてきた。Duda (2001) は課題志向性と自我志向性は独立している（無相関である）が、文化的要因により弱から中程度の正の相関になることがあると記述している。これまでにわが国の体育・スポーツ心理学の先行研究では両志向性が無相関になったことはない。この解釈については研究者で意見が分かれるところであろう。分散分析の結果からは無志向群の競技意欲の低さは顕著であったが、課題志向群と自我志向群に有意な差は示されなかった。課題志向群と自我志向群のみの比較で検討した場合には統計的に有意でないという結果であるが、4群全体から見ると、課題志向群は無志向群よりも闘争心と自己実現意欲が有意に高いのに対して、自我志向群は無志向群よりも勝利意欲のみが高かった。課題志向群及び自我志向群の両群は共にいずれの尺度も両志向群と有意な差はなかったが、無志向群との比較になると、課題志向群が2つの尺度で有意な差を示したのに対して、自我志向群は1つの尺度のみで有意な差を示したという違いが示された。したがって、課題志向群よりは自我志向群の方が無志向群に違い競技意欲であると考えられる。これらの結果は先行研究とほぼ同様の結果であった。

目標プロフィール別の相関関係と因子構造について、両志向群、自我志向群、無志向群は1因子構造となったが、課題志向群のみが1因子構造となった。これは課題志向群の選手は他の群とは異なり、競技意欲に1つの側面を持っていることを意味している。課題志向群の因子構造は、第1因子が勝利意欲と闘争心、第2因子が忍耐力と自己実現意欲であった。相関行列を見ると、勝利意欲と闘争心の相関 ($r=0.57$)、忍耐力と自己実現意欲の相関 ($r=0.35$) が他の群に比べて特に高かったわけではなく、忍耐力と勝利意欲の相関 ($r=0.15$)、自己実現と勝利意欲の相関 ($r=-0.12$)、自己実現意欲と闘争心の相関 ($r=0.13$) の低さが他の群における尺度間の相関関係と異なっていた。このことが2因子構造を構成したと考えられる。

本研究では、課題志向群と自我志向群を直接的に比較した場合に競技意欲の高さの違いは示されなかったが、競技意欲の構造は課題志向群と自我志向群では明らかに異なっていた。競技意欲の構造の違いがどんな意味を持つのかについては本研究のデータのみでは明らかにできなかったため、今後の課題として残される。

文献

- Duda, J.L. (1989). Relationship between task and ego orientation and the perceived purpose of sport among high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11, 3, 318-335.
- Duda, J. L. (2001). Achievement goal research in sport: Pushing the boundaries and clarifying some misunderstandings. In

- Roberts, G. C. (Ed.), *Advances in motivation in sport and exercise* (pp. 129-182). Champaign, IL: Human Kinetics.
- Duda, J.L. & Whitehead, J. (1998). Measurement of goal perspectives in the physical domain. In J. L. Duda (Ed.), *Advances in sport and exercise psychology measurement* (pp. 21-48). Morgantown, WV: Fitness Information Technology.
- Elliot, A.J., & Church, M.A. (1997). A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 218-232.
- Elliot, A. J., & McGregor, H.A. (2001). A 2 x 2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 501-519.
- Elliot, A.J., Murayama, K., & Pekrun, R. (2011). A 3 x 2 Achievement Goal Model. *Journal of Educational Psychology*, 103, 632-648.
- 磯貝浩久 (2002). スポーツ選手の目標設定と目標志向性. 徳永幹雄編著, 健康と競技のスポーツ心理, 不昧堂出, pp133-143.
- Roberts, C. G. (2001). Understanding the dynamics of motivation in physical activity: The influence of achievement goals on motivational processes. In G. C. Roberts (Ed.), *Advances in motivation in sport and exercise* (pp. 1-50). Champaign, IL: Human Kinetics.
- Roberts, G.C., Treasure, D.C., & Balague, G. (1998). Achievement goals in sport: Development and validation of the perception of success questionnaire. *Journal of Sport Sciences*, 16, 337-347.
- 徳永幹雄 (2002). スポーツ選手の心理的競技能力の診断. 徳永幹雄編著, 健康と競技のスポーツ心理, 不昧堂出, pp100-116.